

## 第68回 埼玉県美術展覧会審査評

### 【第3部 彫刻】

審査主任 しみず まさかつ  
清水 正捷

第68回県展、本年度の彫刻部門では、出品数は減少しましたが、力作は多く、作品を前に様々な感銘を受けました。若い人の作品の大胆な制作手法、年配の方の誠実な制作態度、等々です。年齢幅が広がったこともあり、材料も制作方法も様々です。演出・見せ方等を意識した作品は当然高い評価を得ていることになります。

彫刻も制作する場所や材料のこと、時間的な制約など困難さはいろいろです。お互い、何のために作るのか、誰のために創るのかなど、様々な壁に向き合いながら、正解はないかも知れないけれど、それぞれがそれぞれの答を模索しながら、当たり前ではない「平和な時間と空間（戦争することなどのないこと）と自分に与えられた時間と空間（その空間に生きていられること）」などがあることに感謝し、造り続けていきたいと思っています。

素材や大きさ、重量等ほとんど問題はありませんでした。ごく少数ですが陳列に耐えられるかどうか心配のある作品がありました。少なくとも安全性・安定性の問題が生じない作品を“是非・是非”出品していただきたいというのが審査員一同の切なる思いです。

#### ・埼玉県知事賞

まつ ゆめ  
「祭りの夢」 あべ まさよし  
阿部 昌義

祭りの夜店で売られている笛をくわえた愛らしい子供の頭部と手を組み合わせた極めて完成度の高い木彫作品です。

彫刻作品では台座を含めた雰囲気すべてを一つの作品とみなします。作者はこのことを十分考えて作品を完成させる極めて高い彫刻表現技量の持ち主であると思います。したがって本作品が最高賞に値すると審査員一同が一致した意見です。今後の県展彫刻部でのご活躍を期待しております。

・埼玉県議会議長賞

たかまがはら はごろもうさぎ  
「高天原の羽衣 兔」

おかだ きょう  
岡田 杏

羽衣をまとい杖を携えた兔の化身、開いた本、日本の神話を想像させる陶の作品です。眼球や羽衣に塗られてある釉薬<sup>ゆうやく</sup>の赤や目の詰まった陶土の肌感から還元焼成で本焼きをおこなっていることが窺えます。焼き物の彫刻の場合、高温での焼成はそれなりのリスクが生じます。ましてや等身大の立像としてはなおさらですが、この作品は、素材の割合や構造等を工夫し、立像として成立させている力作です。

作品のテーマ性や素材の面白さなど今後の展開が大いに期待できます。

・埼玉県教育委員会教育長賞

「あ・の・ね」

わずみ あきこ  
和澄 明子

オーソドックスな裸婦像です。基本に忠実に、細部まで気を遣い丁寧に制作した作品だと思えます。ポーズは、女性らしい優しい形で、タッチもそれに合った丸みのある女性らしさが感じられます。全体の調和が取れた作品です。

・埼玉県美術家協会賞

「悠」

かんだ まき  
神田 麻紀

端正な形の中に、柔らかな曲線が心地よい空間を表現し、やさしさを感じさせる作品に仕上がっているように思います。

また、作品の木の色と台座の石の色が違和感なく調和されていると感じます。

・埼玉県美術家協会賞

「萌芽」

なかざわ のぶえ  
中澤 庸江

はじめ、材質はなんだろうと思いました。陶芸用の土と聞いてさらに驚きました。手慣れた手法で伸び伸びと制作されていることが窺えます。ここから力強く芽生えんとする内に秘めた魂のようなものを感じます。

・NHKさいたま放送局賞

「<sup>あり</sup>蟻」                      <sup>たかまつ</sup>高松    <sup>あや か</sup>彩華

17歳の女子とは思えぬほどの計算された構成で全体を組み立てた力強さを感じさせるとともに斬新な形で、作者の製作意図が伝わって来る作品だと思います。次回も楽しみにしております。

・埼玉県美術家協会会長賞

「<sup>ふか</sup>深い<sup>うみ</sup>海に<sup>い</sup>生る」    <sup>いちのせ</sup>市之瀬    <sup>よしひさ</sup>宜久

深い海で生きるにはこの形が必要なのかと思わせる乳房を担いだような異形の生物が深海で浮遊している。一方、ブロンズの重量感が無機的にも感じられ、全く海底で動かないのか。とすればなお一層不気味で悪い夢を見ているような。想像が次から次に膨らむ幻想的な面白い作品だと思います。

・高田誠記念賞

「<sup>かいまな</sup>Kaimana」              <sup>しみず</sup>清水    <sup>けいいちろう</sup>啓一郎

ハワイのビーチの名前が作品名になっている鯨の尾をモチーフにした御影石の作品です。その尾には波の文様が彫られており、尾だけで鯨全体の大きさや海までを想像させられ、空間をも作品に取り込む彫刻ならではの醍醐味があります。

石を素材として扱うことは大変な労力と技術が必要になります。ましてやこのような大きな作品となればなおさらです。埼玉県展の委嘱作家として出品されましたが、今後もそのような力作で見る者を魅了し続けてほしいと思います。